

絵入狂言本の信憑性

——新出絵入狂言本『女土佐日記』をめぐって——

北川 博子

元禄から享保期の歌舞伎研究の基本的資料の一つに絵入狂言本があげられる。絵入狂言本が歌舞伎の筋書本であるが故の限界については従来から指摘がなされているが、台帳がほとんど現存しない今日では、当時の歌舞伎を知るための貴重な資料であることには違いない。

今回、平成六年度日本近世文学会秋季大会における松平進先生の御発表「完本『大和絵の根元』など紹介」で、その存在が報告された新出絵入狂言本「女土佐日記」を見る機会を得、紹介と翻刻を「近世文芸」六三号に掲載した。享保十一年に上演されたこの歌舞伎には台帳が現存しており、「歌舞伎台帳集成」第一巻に翻刻が納められている。台帳と狂言本の両者がともに現存している例は極めて珍しく、従来確認されていたのは、享

保十二年の「俊徳丸魁柏」、同十七年の「傾城妻恋桜」、元文四年の「けいせい嵐山」の三作のみであった。かつて、鳥越文蔵氏は「傾城妻恋桜」と「けいせい嵐山」の台帳と狂言本を比較し、狂言本の性格と限界を論じられたことがある。本稿では「女土佐日記」の台帳と新出絵入狂言本との比較により、逆に狂言本の可能性を探ってみたいと思う。

一 併存が確認される三作品の台帳と絵入狂言本の関係

台帳と絵入狂言本が併存しているとはいっても、写本である台帳の性格、または、それぞれがどのような経緯で今日までその姿をとどめているか、などによっても両者の関係は異なつて

くる。まず、従来併存が確認されている三作品「俊徳丸魁柏」、
「傾城妻恋桜」、「けいせい嵐山」の台帳、絵入狂言本の性格を
先学の調査により整理してみよう。

○「俊徳丸魁柏」の台帳は貸本屋の書写で、上の巻と下の巻に
は役人替名付が欠けており、中の巻の筆跡とは異なるので、
後の上演の台帳である可能性もある。絵入狂言本は初丁表は
文章のみ、その裏から最後までは見開き上部に文章、下部に
挿絵といった形式で、題簽、脇題簽、役人替名付等を欠いて
いる。また、挿絵に役者名がないので後刷本の可能性がある。
台帳と絵入狂言本との対照によって台帳の中の巻には二場面
欠落していることがわかる。^(註)

○「傾城妻恋桜」の台帳の第一冊は初演台帳の草稿の浄書本、
第二・三冊は草稿であろうと推定される。絵入狂言本は初丁
表は文章のみ、その裏から最後までは見開き上部に文章、下
部に挿絵といった形式で、脇題簽を欠いている。台帳と狂言
本との対照により、役名の異動、筋の前後などが若干存在し、
また台帳の末尾には廓場が欠落していることがわかる。^(註)

○「けいせい嵐山」の台帳は、初演時の上演用のものと思われ
るが、再演時のものと思われる訂正、あるいは初稿における
ものと思われる訂正が多い。絵入狂言本は、狂言本の出版の

最末期にあたり、本文が四丁半、挿絵が三丁といった形式の
ものである。台帳と絵入狂言本との対照により、もと存在し
ており台帳に欠けている「一冊め」、「二冊め」の内容が知ら
れる。^(註)

このように、右の三作品には両者の間に若干の相異が認めら
れたので、両者を補いながら上演に近いものを考える必要があ
った。

二 「女士佐日記」の台帳と絵入狂言本

それでは、「女士佐日記」の台帳と絵入狂言本の関係はどう
であろうか。台帳の性格については、すでに「歌舞伎台帳集
成」第一巻に櫻井貴美子氏が解題に述べられている。この台帳は
初演台帳の写しで、大野屋惣八の貸本屋用の書写であるが、役
人替名付が各巻に備わっており、それを根拠として、上演を享
保十一年、京都、大和大路の芝居(名代、亀屋久米之丞・座本、
風十次郎)と推定された。しかも、浅尾重治郎がスケとして大
坂から上ったのは三の替であるので、それ以降の上演とされて
いる。さらに、「作者は不詳であるが、この年同座の座付作者
である吾妻三八(風三五郎名残盃)番付」の関与が考えられ

る」とされている。このように、初演の時期を示す番付や評判記の記述がなくとも、台帳のみで上演の推定が行えるほど役人替名付が整っていたのである。

今回みつけた絵入狂言本「女土佐日記」は題簽、脇題簽、役人替名付が完備している。本文は七丁半、初丁表は文章のみで、その裏から最終丁まで見開き上部に文章、その下に主たる挿絵を持つ形式である。萩田清氏は「(この)形式のものとして、はっきりしているのは、享保十年二替り万太夫座、けいせい筑波山、同夷屋座『花賊庵木瓜』が早いと思われ、両書共題簽により八文字屋の板行だと知られる」とされている。それ以前前の絵入狂言本とは異なり、この形式のものは本文の省略が甚だしく、一読しただけでは内容の把握が困難なものも多い。

まず、「女土佐日記」の台帳の役人替名付と絵入狂言本の脇題簽、役人替名付を照合してみると、櫻井氏が「歌舞伎台帳集成」の解題の中で推定されていたことが裏付けられたことがわかる。しかも、両者の役人替名の相違は色子の役者二名について、すなわち、花川大吉の役名が違ふことと菊川音太郎の名と役名が台帳にないことだけにすぎない。

次に、台帳と絵入狂言本の本文を比較するため、台帳によって「女土佐日記」の梗概を示すことにする。傍点線の施してい

る箇所は台帳にあつて絵入狂言本に省略されている場面である。場名は仮に名付けた。

〔上口明〕

大膳屋敷いろは蔵裏門の場

・伏見屋平兵衛（実は長曾我部宮内）が土佐国夜須大膳の裏門へ蕎麦切を売りに来ると、湯女松は丸屋助兵衛と間違え出るが、平兵衛は助兵衛は病氣故に来ぬと嘘を言う。他の湯女四人が出てきて二人の様子を訝る。松は今夜の内に助兵衛に会いたいと平兵衛に迫る。

・そこへ笹井市之丞（実は宮内女房常）が来て、女が夜中に門外に出るのはお家の御法度と湯女達を奥へ入れ、宮内に探っている屋敷の様子を語る。

・そこへ助兵衛が来たので市之丞は隠れる。松は出て、病気の助兵衛が来たことに驚く。助兵衛は隠れた市之丞と松の間を疑い出すが、平兵衛がうまく言いくるめ、助兵衛と松は仲直りして切戸の内へ入る。

・常と宮内が話していると、沢村太郎作が中間元助を連れ出、殿からの用事を言いつける。太郎作は市之丞に濡れかかるが、市之丞が脅して断ると蔵の鍵を渡して別れる。

・宮内は、鍵に太郎作から市之丞への恋文が括り付けてあるのを見つけるが、不義の証拠となるのを恐れた太郎作が元助を取返しによこす。市之丞と元助はもみ合いになり、市之丞が女であることが露見してしまふ。市之丞は元助を殺し、平兵衛が死骸を井戸へ入れる。

・そこへ助兵衛と松が出て死のうとするので、平兵衛が訳を聞くと、落ちぶれて金もないと嘆く。市之丞が蔵から千両箱を投げ、二人を逃がしてやる。

〔上の巻〕

大膳屋敷湯所の場

・妻辻法眼と長島三左衛門、十市新三郎が湯女達と酒盛をして、いるところへ、茂次兵衛と吉六が湯樽を担い門口へ入る。

・そこへ、宮内の倅弥三郎と太郎作の女房おしほ、妹お石がやぶて来て、法眼らを窘めていると、酒に酔った大膳が傾城都路太郎作や小姓らとともに来てぶざけ合う。

・その様子を見ていた弥三郎とおしほは大膳を諷める。

・大膳らは酒盛をするため奥へ入り、太郎作はおしほに帰るよにおしほに言う。おしほとお石が太郎作の慢心を意見すると太郎作は刀を抜き、一人を切ろうとするが、最前より出て話を聞いて

いた茂次兵衛と吉六が宥める。

・そこへ、蔵の金を盗んだ科人として捕まり、弥三郎の計らいで一日だけ半から出てきた助兵衛が松とともに出て来る。弥三郎は夜が明けたら屋敷へ戻るよにおしほに言う。おしほとお石とともに帰る。

・茂次兵衛と吉六は助兵衛の命乞いを家老桑名蔵人に願うよにおしほに言う。おしほは風呂の中へ隠れる。

・弥太七を連れ戻した蔵人の後ろからお石の幽霊が付いて出る。湯女四人が蔵人に挨拶をするが、かげの病故おかしなことはかり言ひ蔵人を皆は気味悪がる。

・酒盛をしているところに松が出て、助兵衛の命乞いをするが聞入れられず半へ行こうとする。

・お石は蔵人に、病氣の原因は生前惚れていた自分のせいであると言い、病氣を治す代りに兄であり今は助兵衛となっている井の村佐助の命を助けてくれるように頼む。蔵人は聞入れお石は消える。

・蔵人達が佐助を人知れず門外へ出したいと思案しているころへ茂次兵衛が出て、空樽に入れて外へ出すことを請負ったので蔵人達は奥へ入る。

・佐助が樽の中へ入り、松が茂次兵衛に後のことを頼んでいる

ところへ太郎作が来て松に戯れかかるので、茂次兵衛が松を奥へやろうとするが、三左衛門と新三郎も出て太郎作へ加勢する。茂次兵衛がこまかして松を奥へやる。太郎作は樽を槍で突こうと侍を呼び、茂次兵衛と立回りをしているところへ「御上使」の聲が上がる。

・吉六は庄助として、茂次兵衛も上使木の下藤七として上下を付けて座に付く。藤七は太郎作に、信長公の仰せにより大膳の所業を聞出したいので、近習一人を召し出すように言う。
・藤七は庄助に樽をあげさせ、佐助を自分の屋敷へ連れ行くように言付けて奥へ入る。
・襖の後ろから聞いていた大膳は慌てて、市之丞に役目を仰せ付ける。

大膳屋敷奥の場

・藤七と対面した市之丞が大膳の所業の言訳を見事に果したので、藤七は帰っていく。
・大膳は喜び、都路達を連れ酒宴のため奥へ入る。
・弥太七を連れられた蔵人は太郎作に出会い、初対面の盃をする。
・弥太七はわざと太郎作に亀相を仕掛け、太郎作から叩かれ、蔵人からも隙を出される。弥太七は太郎作を殺し、蔵人から

金を買い逃げる。

〔中の巻〕

下屋敷の場

・小督、腰元お品、お石を連れ、連御前が弥三郎と話すところに都路と花野が来るので、連は遺手姿となり廊の話をする。
・そこへ宮内が出仕し、茶を入れた市之丞と初対面を装いながら、その場にいた人々を口実を付けて追いやり話をする。
・大膳が出、宮内に毒入幾世餅を食べさせようとしたので市之丞は言葉の端々で宮内に用心するように知らせる。宮内は餅を食べた振りをし、苦しがつて暇を乞う。
・大膳は宮内の容態を見に行かせるが、毒を食べた様子がないと聞き、市之丞が宮内に知らせたことを責め、毒入幾世餅を食べるように言う。

・市之丞は松を呼ぶように頼み、幾世餅を食べ苦しみだす。そこへ、松が来て姉妹の名乗りを上げる。
・宮内が駆けつけ、大膳を刀で叩き諫言し、大膳は心を入替えた振りをする。市之丞は息を引取り、宮内を残して皆々奥へ入る。
・蔵人が出仕し、出て来た小督を挟んで、宮内は蔵人を床の置

物の命々鳥に、藏人は宮内を蝸牛の掛物に、それぞれをなぞらえてあて言をいう。

・兩人は果し合いをしようとするが、運が出て止め、五日間その勝負を延期させる。

〔下の巻〕

大膳屋敷大広間の場

・おしほと小督が出、出仕した佐助と話をすると、ころへ、朝日と弥三郎、お石が出、運から呼ばれた湯女達と都路母が出る。

・運が出て、湯女と都路に金を渡して隙をやる。

・そこへ宮内と藏人が現れると、運は大事の決心をしたから、次の間でその善し悪しを聞いて貰いたいと言う。二人は次の間に控える。

・運は朝日には大膳の首を切ることを、佐助には検死役を言付けたので、朝日は宮内と藏人に相談する。

・大膳に組みする悪党三左衛門を佐助が、新三郎を運が殺す。

・朝日が大膳の殺害を決心したので、運は九つの時計を合図に自らの絵姿の掛物を目当てに遠矢を射るように言う。

・弓を射ると運が矢を両脇に立てている。運は大膳の首を自ら討取ったことを明かす。

・木の下藤吉からの状で、土佐国は宮内へ養子へいつている運の実子弥三郎が継ぐことになる。

以上のように見ていくと、絵入狂言本には梗概本であるが故の省略部分はあるものの、ほとんど合致していることがわかる。「傾城妻恋桜」のような筋の前後も見られない。ただし、「上口明」で沢村太郎作が登場する場面では、太郎作が殿の御用を伝える箇所が違っているが、これは記述を簡略化するための手法の一つと考えられ、筋の前後とまでは言い難い。

このように「女土佐日記」の台帳と絵入狂言本は、ともに上演に近い姿を表しているものと考えられる。台帳とこれほどまでに同じ内容を持った絵入狂言本はこれまでになく、両者を比較検討することによって、絵入狂言本の記述の信憑性を見極めるには大変資料的価値の高い絵入狂言本の出現といえよう。

三 絵入狂言本における場面の省略

享保年間の絵入狂言本と役者評判記の綿密な照合をされた荻田氏は「絵入狂言本に抜けている部分は各場の冒頭に多いと思われる。それは滑稽な場、独立した場であることが多いので梗

概本の性格として省略しやすいのであろう」とされた。荻田氏は二の替狂言を対象にされたこともあろうが、「女土佐日記」については、そうは言い切れないように思われる。

「女土佐日記」の台帳の「上口明」に相当する絵入狂言本の本文には省略場面はなく、比較的丁寧な筋を追っている。これは、絵入狂言本が初めを丹念に描き、次第に粗略に筋を追っていく性格があることに起因するのであろう。この場については、絵入狂言本だけでも十分に内容を理解することができる。

しかし、「上の巻」に入ると、絵入狂言本には省略されている場面が出てくる。幕が開くと花道を通って、茂次兵衛と吉六が有馬の湯の入った樽を担い、門口へ入っていく。この短い場は狂言本の記述にもあるが、その後、夜須大膳の家来達が湯女相手に酒を飲んでいるところへ、沢村太郎作の女房おしほと妹お石がやって来るところは描かれておらず、すぐ後の大膳と太郎作の登場については触れられているものの、小姓や禿とのやりとり、おしほとお石による諷言については全く記述がない。この他、「中の巻」で、長曾我宮内が出仕の後、大勢で会話を交わしている場面、「下の巻」の冒頭で富内女房朝日とそこに居合わす人物達との会話の場面などが省略されている。これらの場は荻田氏の言うような「滑稽な場、独立した場」だけでは

ない。

それでは、全体から見てさほど重要な場ではないから省略されているのであろうか。しかし、先に触れた「上の巻」冒頭の茂兵へと吉六が湯を担い出る場面は、台帳でも、

半四郎（茂次） エイ／＼エ

宗（吉六） エイ／＼エ

半（茂次） エイ／＼エ

宗（吉六） 茂次兵衛 しんどいは

半（茂次） 吉六 肩せい

宗助（吉六） 合点じや

二人（茂次 吉六） これわいの

ト肩かたして門口（むち）へはいる

とあるだけの軽い場面である。しかし、狂言本には本文だけでなく、挿絵にまで二人の姿が描かれている。また、「中の巻」冒頭で連が遺手姿となり都路に廓の話をする場面は、本筋とは無関係な滑稽な場であるにもかかわらず、絵入狂言本には本文、挿絵ともに記述がある。これらに比べると、省略されている場面の方が重要さは上のようにさえ思われる。重要であることだけが採用の基準ではないようである。

それでは、なぜに省略される場面が生じるのであろうか。省

略される場面を読むと、狂言本には登場しない人物が主要人物と五角の台詞のやりとりをしていることに気付く。役人替名にあって、本文に登場しない人物については、萩田氏が「見返しの役人替名付に載る人物が、本文中の中に全て登場するわけではない。端役の場合、筋に直接かわらなければ無視するようである」とされている。しかし、「女土佐日記」を読む限り、その場においてはある程度の役割をしているおしほやお石のような人物まで登場させていないのである。狂言本には紙数の制限があり、全ての役者を登場させることはできない。よって、上位の役者から登場させているのであろうが、登場させない人物が主、或いはそれに近い存在となっている場合は、御愛せざるを得ないようである。それ故に、後に上使となって登場する主要人物の茂次兵衛達が桶を担う場面はたとえ軽くとも描かれ、おしほやお石の諫言の場は描かれないのであろう。登場させる役者を絞ったために省略箇所ができたものと思われる。

四 絵入狂言本における台詞

絵入狂言本の直接語法は台詞ではない、ということとは従来からいわれている。事実、この「女土佐日記」を見ても台詞が簡

略化された形になっている。そして、役者の芸の見せ所である長台詞等は内容すらわからない書き方である。たとえば、「中の巻」で笹井市之丞に毒を吞ませた主君夜須大膳に長曾我部宮内が諫言する場面であるが、台帳には宮内が扇で大膳を打った後に非常に長い台詞がある。しかし、狂言本では「所へ宮内かけ付。大ぜんをさんくむね打してかんげんする」といった記述になっている。また、同じく「中の巻」で、宮内と桑名藏人がそれぞれ命々鳥の置物と蝸牛の掛け物になぞらえて、あて言という場面は、大谷広次と坂東彦三郎といった、この座における立役両雄の芸の見せ所である。台帳ではそれぞれ力のこもった長台詞が用意されているが、狂言本では「あて事をいふ」としか書かれていない。狂言本をもとに台詞劇である歌舞伎を研究するにはあまりにももどかしい点である。

しかし、実際の台詞は以外と狂言本に取り入れられているようである。その例を示してみよう。

「中の巻」で宮内が大膳の勧める毒入りの幾世餅を食べようとしたとき、台帳には、

菊[?](市之丞) コレ

ト詞をかける 皆く菊之丞(市之丞)に気を付ける

菊(市之丞) 宮内様 殿様のおてづからの御馳走 有難

ふ思召て御賞版なされませい

ト氣を付ける

広(宮内) 道理く 御家中幾万人の内でお手づからの御馳走は宮内専人 うらやましう思ふての事か あやからしやれく

ト言ふて餅食ふてしもふ

とあり、この市之丞の「氣を付ける」演技で宮内は毒入りであることを悟る。狂言本には「市之丞是とこまかけ。殿様のなされたくわし。有かたふ思召ませ。宮内いくもちくい。茶をのみくるしがる」とあり、市之丞の台詞をほぼ忠実に再現していることがわかる。ただし、台詞のみを生かし、演技面での記述がないので、この台詞の隠れた意味についてはわかりにくい。狂言本には続いて「我は宮内へしらせたな」とあるので、市之丞が何らかの手段を講じたことがわかるだけである。

また、「中の巻」で宮内と蔵人の打ち合いを、連の取りなしで五日延引する場面にしても、台帳の蔵人の台詞に「土佐一國の法にて、抜き放した鞘を砂へ突き立てからは、相手の血を刀に付けねば鞘へ納ませぬが、御先祖代くよりの御法式でくれば」とあるのを生かして、狂言本では「打合所へはちす出とめ

給ふ。此國のならい刀に相手のちを付ねば。さやへおさめぬといふ。此しやうぶ五日のべてたも。兩人がてんすれば。五日のべるといふ」となっているが、台詞を羅列しすぎて文意が通りにくくなっているほどである。このように、台詞と狂言本を付き合わせると、案外台詞がそのままに近い形で取り入れられていることに気付くのである。

五 狂言本の挿絵

絵入狂言本の挿絵については、鳥越氏が「舞台図式―舞台上の場面として描いたもの―でない」とされている。果たして、狂言本の挿絵はただの「絵空事」なのであろうか。

そのことを考える上でも、今回「女土佐日記」の絵入狂言本が見つかったことは貴重であろう。なぜならば、台帳の舞台書がこの頃のものとしては詳細に書かれており、それと狂言本の挿絵を丹念に比較できるからである。

台帳の「上口明」の舞台書は付のようである。

造り物 臆病口より端掛り迄皆く蔵 本舞台真中ほどに
切戸あり 端掛り裏門の体 脇皆く白壁 蔵五ッほどあり
り 一ツくいろいろの印あり 棧敷の前皆くいろいろは付

図版① (1丁裏・2丁表)

図版② (2丁裏・3丁表)

の印^し藏^りなり 裏門^{うらもん}の脇に井戸あり

一方、狂言本の書き出しは、「土佐の国夜須大ぜん殿の裏門へ。ふしみや平兵へそば切にない売来る」で、台帳の舞台書の「端掛り裏門の体」のみが記されている。ここでの装置としての眼目が藏であることは台帳により明白である。「臆病口から端掛り迄」つまり、舞台の背景はすべて藏なのである。しかも、客席である棧敷まで藏に見立てている。しかし、狂言本の記述で藏が舞台上にあったことがわかるのは「市之丞藏ノまどより。千両入なげ出しやる」だけである。ただし、台帳の「上口明」に相当する場面を描いた図版①、図版②にはともに藏が描かれている。図版①では裏門が画面左に描かれており、台帳の舞台書「端掛り裏門の体」に合致している。図版①左は沢村太郎作が笹井市之丞に濡れかかる場面、台帳を読むと裏門に近いところで演じられたことがわかる。図版②右に描かれているのは、太郎作の中間元助に女であることを見破られた市之丞と伏見屋平兵衛が元助を殺害するところである。この場面も、舞台上ほぼ同じ裏門の前で演じられ、台帳では元助の死体は平兵衛が井戸の中へ投げ込むことになっている。この「井戸」に関しては、台帳の舞台書には「裏門の脇に井戸あり」とあるが、狂言本の挿し絵には描かれておらず、本文の記述も「市之丞身の大事み

られ。ゆるされぬと切ふせ。とゞめさし平兵へにしがいかたづけさしわかれける」となっている。井戸の省略はあったにせよ、裏門での殺害に関しては絵は忠実に描いているといえる。しかし、この図版②は画面右に裏門が描かれ、図版①とは一見矛盾しているかのようにも見えるが、挿絵は右から左へ進行していくので、次のように考えるとこの矛盾は解決する。図版②左には、平兵衛が心中を決意した丸屋助兵衛と松に逃亡を勧め、市之丞が藏から千両箱を投げる場面を描いている。一見舞台上の手と下手を逆に描いているかのように見えるが、この二場面の背景は連続していない。舞台上の演技は、橋掛りの裏門から中央よりの藏に移動しておこなわれており、この二場面を仕切るために、台帳にはない松の木を画面中央に描いたのである。狂言本の場面の仕切りには壁や塀などが用いられるが、この場面にはそれらはおかしい。より自然な仕切として松が用いられたのであろう。

この場面で、台帳にあり絵入狂言本にないものは「切戸」と先ほど触れた「井戸」である。舞台中央にあり、人物の登退場に使われている「切戸」は狂言本の挿絵では省略されており、本文でも「ろうじ」に変えられている。「井戸」については先述の通りであるが、このような省略は挿絵のスペースの問題

であらう。全てを描ききることは到底無理である。そして、大道具類を省略する時は、挿絵に合わせた記述の本文となっている。

続く「上の巻」の台帳は、

道具立 有馬の湯所の体 本舞台芝間の風呂 両脇様つけ
て板囲ひ 湯口も両脇も幕立りある 右の道具奥へ少し引
込める

とあり、狂言本の三丁裏・四丁表の挿絵中、茂次兵衛、吉六の背景に描かれている。台帳ではこの後「橋掛りへ向二階造り宿屋の体」の説明があるのだが、挿絵では描かれていない。ただ、返し道具にて「舞台残らず金唐紙に成る」は、四丁裏・五丁表の挿絵右上の背景に描かれており、木の下藤七と市之丞がその前に座っている。その前には茂兵衛の大立ち回りが描かれているが、この立回りが前の場面であることは、絵入狂言本を読むだけでもわかる。

「中の巻」の数奇屋造り、「下の巻」の道具立は細かく台帳の舞台書が記されているにもかかわらず、狂言本の挿絵は屋内故か類型化して描かれている。これも、限られたスペースの中に人物を描かなくてはならない故の省略であらう。

それでは、小道具類はどうであらうか。挿絵に描かれている

ものについては全て台帳で確認することができる。しかも、「下の巻」の連の姿絵は図柄までもが正確なのである。これは、連が障子の中に呼び寄せた大膳を、井の村佐助と朝日に弓矢で射させるための的として用意したものの（実は自分を射させるためのもの）である。この掛け物を見た蔵人と宮内の台詞が、

彦（蔵人） 絵姿は お御台様の天を拝なさる、体

広（宮内） 天の一字を離せば、二人といふ文字

彦（蔵人） 二人を拝む ム、

と台帳にあり、その図柄が重要な意味を持っていることが判明する。ここは狂言本の本文では「はちす姿まの。かけ物かけ。おくへ入給ふ」とあるだけであるが、挿絵には天を拝す連の姿が描かれている。

荻田氏は狂言本について「欠落は確かにあるが、しかし、上演と無関係な場を故意につくりあげることはないとみてよいのではあるまいか」とされた。これは、狂言本の挿絵についても言い得ることはないだろうか。本文同様限られたスペースに挿絵を描かなくてはならないので省略はあるが、故意に舞台と異なったものを描くことはないことがわかる。つまり、描かれているものについては「絵空事」ではなさそうである。省略や類型化はあるにしても「虚」を描くことはないように思われる。

絵入狂言本は歌舞伎の上演に合わせて出版されたものであり、
独立した読み物でない。観客達は絵入狂言本を読んで観てきた
舞台を思い出せばよかったのである。それ故、省略部分があつ
ても余り問題にはならなかつたのであろう。現代の我々にとつ
て絵入狂言本の記述はあまりに粗略で、そこから当時の歌舞伎
を復元することに限界を感じてしまうのは事実である。しかし、
絵入狂言本が当時の歌舞伎研究の根本資料であることには相違
ない。

「女土佐日記」の台帳と狂言本を比べてみると、絵入狂言本
の表現に物足りなさを感じはするが、「虚」は描かれていない
ことがわかる。描かれている「実」から当時の舞台を再現する
こともある程度はできそうである。従来のように狂言本を使つ
た戯曲構成的な研究に加えて、断片的に残る台詞や挿絵に描か
れた舞台、小道具の研究も今後はなされるべきかと思われる。
特に歌舞伎と絵画の関係は江戸時代を通じて切つても切れない
関係にある。「絵を読む」ことは今後の演劇研究には不可欠な
要素であらう。

注1 鳥越文蔵氏「元禄歌舞伎放」(八木書店刊)第三部「絵入狂
言本研究」。以下、鳥越氏の論は、この御論考による。

2 河合真澄氏「享保期の上方歌舞伎——俊徳丸兎杓」をめぐ
つて」(「国語国文」第四九卷第二号)、古典文庫「上方狂言
本」八(土田衛先生・河合真澄氏編)の解題、「歌舞伎台帳集
成」第一巻の解題(河合氏著)による。

3 注1の鳥越氏の御論考、荻田清氏「けいせい夫恋桜」の構
成に關して」(「梅花女子大学文学部紀要」第一八号)、「歌舞伎
台帳集成」第二巻の解題(荻田氏著)による。

4 注1の鳥越氏の御論考、「歌舞伎台帳集成」第三巻の解題
(須山章信氏著)による。

5 荻田清氏「けいせい夫恋桜」の構成に關して」(「梅花女子
大学文学部紀要」第一八号)。以下、荻田氏の論は、この御論
考による。

6 以下、台帳の引用は「歌舞伎台帳集成」第一巻による。